「スポーツ国家アメリカ」民主主義と巨大ビジネスのはざまで

鈴木　透著：中公新書

ヨーロッパ発祥のサッカーやラグビーは中世、町の祝祭の行事として始まり、最初のうちは競技者のためのスポーツだったが、観客など競技者以外の存在も無視できなくなり、ルールが整備された。

ヨーロッパの競技とは異なり、アメリカではスポーツは別な発展を遂げた。今ではアメリカの国技ともいえる「野球」は、南北戦争の時代に兵士のレクリェーションとして広まったものだが、「アメリカンフットボール」はハーバード大学のフットボールが元で、1903 年には年間試合の死者が 44 人にも達したため、粗暴性を排除する厳しい罰則が制定され競技もスポーツ化した。「バスケットボール」は青少年にキリスト教の精神を広めるために設立された YMCA が冬場に体育館でできる運動として作ったものだが、このスポーツは黒人や女性などにも普及した。

アメリカ生まれのこれらの三競技は戦争や愛国主義とも結びつき、今もプロの試合前には国歌斉唱が行われている。

本書は、主にアメリカ型競技の歴史を紹介するとともに、スポーツがアメリカ社会に果たしてきた役割を広い視点からとらえた優れた読み物となっている。

黒人ができるスポーツは当初は競馬やボクシングだったが、陸上競技、野球など徐々に分野が広まっていったことや、冷戦時ソ連に対抗する必要からオリンピックの女性アスリートが登場したことなどエピソードには事欠かない。

アメリカではメジャーだが国際的にはマイナー種目でしかなかったアメリカ産のスポーツだが、「大リーグこそ野球の最高峰だ」との主張ももっともで、「アメリカ　イズ　ナンバーワン」と鼓舞するトランプ大統領が登場した政治の背景にはアメリカのスポーツ風土もあるのではないだろうか。

アメリカのスポーツの歴史が提示する教訓は、今年のラグビーワールドカップや来年の東京オリンピック・パラリンピックを開催する日本にとっても問題意識を共有する契機になると著者はいう。

アメリカ文化をおさらいするうえで、一読をお勧めしたい。

（シニアネットワーク　齋藤　隆）

エネルギーレビュー誌の書評欄　2019 年 4 月号掲載